

# 交流

〈大会発表要旨〉

## ◆伊藤美重子

敦煌資料にみる唐代の婚礼の俗習について 唐代の民間での婚礼の俗習について、敦煌写本『下女夫詞』およびそれに付随されることの多い「呪願新郎（女婿）文」「呪願新婦（女婦）」「障車詞」「婚礼詩」および婚礼の次第の記述が残る「書儀」を資料として、その内容を『儀礼』『大唐開元礼』の記述や『世説新語』『酉陽雜俎』『封氏聞見記』での記載などを検討しながら、当時の婚礼の俗習の状況を述べた。また、敦煌壁画に残る婚礼に関する画像資料を紹介した。

## ◆橋本陽介

物語における時間と話法と、これからの研究について 小説は言語の芸術であり、その研究は広く人間言語の研究の一環としても捉えることが可能である。しかしながら、現代においては言語学の研究と文学の研究は分断されている。ナラトロジーの登場以降、日本文学でもテキスト分析が行われるように

なったが、言語学の成果を参照しているものはまれである。言語の分析をするのであるから、言語学を参照にすれば、よりよい分析が可能になるはずである。

一方、言語学の方でも、小説言語は例外的なものとされ、あまり顧みられていない。小説言語の分析から、逆に言語学の理論を変更することも可能である。本発表では、日本語・中国語小説における時間と視点（話法）に関する発表者のこれまでの研究を概観した。これによって、かに日本語・中国語のテキストが構成されているのかを明らかにした。さらに今後明らかにすべき問題を予告した。

（例会発表要旨）

## ◆陳暁

清代北京語の研究資料について 清朝の後期（十九世紀）になると、北京の社会には様々な変化が起こり、文学の新しい形式（特に通俗文学、芸能）や外国人が編んだ文献（特に北京語を反映する教科書、例えば日本明治時代の中国語教科書および西洋人が編纂した教科書等）も多く現れるようになった。また満漢対訳文献の漢語部分も北京語を反映す

る資料となる。本発表はそうした文献の諸テキスト及び二十世紀初期の北京語録音資料をまとめて説明した。また、清朝後期における標準語の変化についても述べた。例えば、満洲語を理解する満洲族や旗人は清朝後期から徐々に少なくなり、使用言語は北京語に変わった。また十九世紀四十年代頃に、中国全土で通用する標準語は南京官話から北京語に変わり、外国人と地方の人々が学ぶべき言語も北京語に変わっていた。最後、研究例を一つ取り上げ、北京語の重要な音声現象「尖音団音の統合」を論じた。特に満漢対訳文献を用いた。結論として、十八世紀前半、北京語の尖音・団音はまだ区別されていただろうと思われる。

## ◆新沼雅代

東南アジア華人と文化 東南アジア華人は、独自の文化を求めるとしても、結局は多くが中国由来であるのが現状で、ジレンマを抱えている。この問題を本発表では「独自の文化探しの呪縛」と表現した。例えばシンガポールは、経済発展を達成し、文化や芸術の面に力を注ぐようにシフトしたが、

多くが中国由来であることがより強く意識される結果となり、却って国民に「独自の文化探し」の圧力を与え、若者の中国離れやヨーロッパ志向を促している。また、植民地時代にヨーロッパ人によって定義された「東洋外国人」という括りが、現在の東南アジア華人のメンタルの根幹であり、さらに「中国性 (Chineseness)」は、東南アジア華人と

中国の間の重要な絆となつている。一方で、東南アジア華人の独自文化の醸成を制限してしまつていと指摘した。これを解決する一つの方向性が、東南アジア華人によって自身の「超越性」が自覚され、現代における「東洋外国人」として再覚醒していくことではないかと述べた。

◆董子華 沈約の「郊」について 中国古典文学において、「山」と「都」はつねに対立的な存在であると認められている。「郊」は「都」の外の空間であり、「山」と「都」とも異なる空間であると同時に、両者と重なる要素も有している。南朝に至ると、「郊」はかなり開発され、次第に皇室、士族たちが居住したり、遊覧した

りする場所になつていた。南朝の代表的な文学者の一人である沈約には「郊」に関する詩文がいくつもある。特に彼の「郊居賦」において、かなり細かい筆致で建康東郊の景物や彼の郊居生活などを描写し、沈約の独特な隠逸観を示している。従来の先行研究は主に「郊居賦」に見られる沈約の隠逸観に注目し、「郊」自体に対する考察は十分であるとは言えない。

本発表では、沈約の「郊居」を描く詩文を中心にし、「郊居賦」に述べた沈氏一族の播遷と沈約の隠逸観が矛盾しているのではないかと分析し、沈約にとつて、「郊」がどのような空間であるのか、明らかにすることを目的とした。

◆白蓮杰 金末モンゴル王朝期の文学のあり方について——耶律楚材と元好問の作品を中心に 本発表は主に、金末からモンゴル王朝期を生きた二人の文人、耶律楚材と元好問の文学作品のあり方について比較したものである。金王朝滅亡以降、耶律楚材はモンゴル王朝の基盤固めに尽力し、政治家として高く評価されているが、文人としてはあまり評価され

ていない。一方、元好問はモンゴル王朝には仕官しなかったが、金末の代表詩人として後世に高く評価されている。本研究では、このような対照的な二人の作品のあり方について考察し、金末モンゴル王朝期における文学のあり方及び戦乱期に置かれた文人たちは社会や文学に対してどのように向き合つていったのか、という問題を明らかにした。

◆鈴木直子 戯単資料からみる天津の遊芸場 日本における戯単(中国の芝居番付)資料の紹介と、民国期の遊芸場について、天津や北京、上海三都市での形成や発展を調査し報告した。研究の動機は、平成二十九年度の早稲田大学「演劇映像学連携研究拠点」での公募研究「中華民国期の伝統演劇資料から見る劇場と劇種に関する研究」(研究代表者・鈴木直子、研究分担者・波多野真矢)による。日本の戯単は、「京劇通」といわれる中国滞在経験者や漢学者によって収集された。中でも辻聴花は数百枚を所蔵していたが、遺品は不明という。名古屋大学図書館には青木正児文庫が、九州大学

図書館には濱一衛文庫があり、特に濱一衛文庫は同大学の中里見敬氏により近年研究が進められている。また慶応大学中国文学研究室には奥野信太郎所蔵品があるが、未整理のままである。演劇博物館には四十九点とポスター一点があり、日本画家の若柳柳湖氏寄贈が六点、実藤恵秀氏寄贈が二点、未整理品が四点でその他は新規購入品である。劇場は北京、上海、大連、青島、天津といった当時の日本人居留地にあり、特に天津が多く、遊芸場の戲単も珍しい。上海では、租界の存在により西洋文化を受容し、私的な庭園を楽しむ園林文化から近代性を備えた娯楽空間へと変貌した。天津では初期には清末の園林文化を継承し、北京近郊のため遣臣や高官の社交場の役割も兼ねていた。ポスターは一九二〇年代の勧業場の天華景戲院の物で、評劇が天津で人気の劇種だったことを裏付けている。北京では多様な戯曲や曲芸が楽しめ、各劇種の劇場が多数存在したため、遊芸場はさほど発展の余地が無かったという結論に至った。

◆永江貴子 『幫』を用いた文のポライトネス性について 中国語の要求表現において、『幫我』が依頼のポライトネスマーカーになりつつあると、従来の研究で述べてきた。この『幫』に関し、近年、中国大陸において以前は受益者を導く語として、『給』の使用が見られた文で、『給』ではなく、『幫』を用いる例が観察されている。更に、店員にコーヒーを注文する際に、『幫我做杯咖啡。』という文を用いるなど、更なる文法化が進んだ例も見られる。本発表において、この『幫』を用いることは、ポライトネスに配慮した表示表現であることを提示した。また、この配慮表現において、『幫』が何故多用されるようになったかに関し、『幫』の意味的特性からそのメカニズムを考察した。

◆安藤好恵 中国語学習者の習得状況に関わる要因の探索 同程度の学習環境にありながら習得状況に差が見られる要因の一つとして、学習者要因が挙げられる。本研究では、中国語学習者に内在する要因の解明を目的に、大学で中国語を専攻する一年生を対象とし、入学時の英語スコアによるクラス、学習への取組み方、ピリーフを取り上げ、学年末に行われた学習到達度を測る試験の得点を用いた習得状況との関連性を調査した。決定木分析を用いて検討した結果、英語スコアによるクラス、協調的学習への積極的態度などが高得点者群の判別要因として示された。さらに中低得点者群について、アンケート調査項目と試験得点について相関分析を用いて検討した結果、協調的学習や自律学習などを重視する学習態度が習得状況につながっている傾向が示された。こうした調査結果をもとに、有効な学習支援のあり方について考察した。

(修士論文要旨)

◆福島俊子 老舎とキリスト教―その受容と作品への反映― 老舎がどのようなキリスト教を受容し、それがどう変化したか、また社会主義体制下でもキリスト教との繋がりがその精神性を持ち続けたかを考察した。老舎は大病を患ったことを契機に、人の役に立つ生き方をしようと考えたとき、教会の英語学校で

宣教師の広宝林に出会い影響を受けた。入信後行った日曜学校の改善提案や教会の中国化運動の内容から、老舎はキリスト教の教義への信奉を基に、キリスト教による社会改革を目指したものと推測する。前期の3作品からは、社会改革に傾倒するもそれを疑問視し、遂に断念に至るまでの変化が読み取れる。建国後の作品には、共産党政権の対キリスト教政策を賛美する内容や、不良信徒や牧師、帝国主義を後ろ盾としたキリスト教への批判や憎悪が描かれ、時代による老舎とキリスト教との関係の変化が感じられる。一方、人の役に立つことを喜びとする、無償の愛を体現する人物が全作品に登場し、老舎はそれを生涯大切にしていたと思われる。

◆高暢「俗」への再評価―柳永の艶詞をめぐって 本稿では、柳永の艶詞の「俗」を巡り、再評価を行う。柳詞にはおおむね羁旅行役詞と艶詞という二種類がある。そして、雅俗への討論は昔から今まで常に論述の焦点になっている。柳詞への評価も否定と肯定という二つの意

見に分かれる。本稿は艶詞の俗に賛成するが、「俗」は具体的に何を指すのか？そして、「俗」以外に、何が含まれるのかについて疑問を持っている。そして、日本では艶詞の俗をめぐる研究はあまりされていないため、不十分と言える。中国では柳詞は全体から分析を行い、艶詞だけを研究の対象とするのは少ない。本稿は前人の研究を踏まえ、そして、今までの先行研究に残された課題を出発点として、それぞれを分析した上で、「俗」への再評価を行う。本稿では、宇野氏の雅の説と余氏の俗の説を参考とし、『柳永詞詳註及集評』をテキストとして、まず、柳詞の全体を考察してから、艶詞の考察範囲を定めている。次に、艶詞をテーマで分類する。序章は、研究動機、日本と中国の先行研究のまとめ及び、研究内容と方法を紹介する。第一章は、表と「俗」の融合を二つに分けて論述する。また、詞に生活に使われる口語を入れ込むのは艶詞の通俗性を強化させる。俗を以て美と成すと考える。詞の典故の運用

は詞のそのものを雅化する技法である。しかし、柳詞に使われた典故は常によく知られるものであり、わかりやすいものである。俗を以て雅と成すと思われる。第二章は艶詞の内容の「俗」を中心に、テーマにより、艶詞を三つに分類してから、詞の内容を詳しく分析する。艶詞は大體闍怨詞、歌妓を褒める詞、合歡詞という三つのテーマに分けられる。闍怨詞の「俗」は直接に自分の考えを言い出すことの「浅」である。歌妓を褒める詞は時代に従ってから生まれたもので、「世俗」の意味を持つと考える。合歡詞は露骨な描写が特徴で、「輕薄」と「淫」の面に「俗」の意味を持つ。しかし、艶詞には二首の悼亡詞がある。昔は悼亡詞の対象は常に奥さんであるが、柳永が他の詞人と違い、底層に生きている歌妓を悼むことから彼の彼女たちへの同情心という気持ちを伺うことができるだろうか？

◆趙美子 曹丕と曹植―史実と作品をめぐって― 本稿は先行研究を踏まえ

て、曹丕と曹植に関する若干の史実を再検討した上で、さらに曹植の後期作品を幾つか挙げて、従来の解釈の見直しを試みた。第一章では、文学のやり取りと後嗣問題をめぐって、建安年間における曹丕と曹植の関係を分析する。現存する作品と史実から見れば、建安年間の曹丕と曹植は多くの親しいやり取りをしていたので、一貫して仲が良いと考えられる。第二章では、従来曹丕に非難を浴びせた曹植の仲間への誅殺や、曹植の「罪」への処罰と封国の転封などの問題点、そしてこの時期のやり取りを検討し、曹丕即位後における二人の関係を分析する。この時期、確かに曹丕と曹植の間に様々な不愉快なことが起こったとしても、相手を大切にする気持ちは変わらないと考えられる。第三章では、黄初年間に作られた「洛神賦」「聖皇篇」「文帝誄」三つの作品を中心にして、曹植作品における曹丕への個人的感情の表現を分析する。以上を通じて、曹丕と曹植の関係はマイナスの影響を受けたが、互いへの愛情は変わらないという結論を出している。

◆陳珂瑛 一九二〇年代の中国における「雨」の散文観と人生観―周作人『雨天的書』と許地山『空山靈雨』の比較―  
本研究では、一九二〇年代の散文学作品における「雨」を研究対象とし、散文学の大家である周作人と許地山の同時期に出版された「雨」と題した散文学作品『雨天的書』と『空山靈雨』を中心に、二人の散文学作品の中で現れた

「雨」のイメージの相違を考察する。そして、「雨」に対する見方の相違から、一九二〇年代の周作人と許地山の散文観と人生観に与えた影響を考察する。論文の構成としては、第一章では、主にこれまでの日中五四退潮期研究を紹介し、散文研究の中の周作人研究と許地山研究、それぞれの研究成果を説明する。第二章では、『雨天的書』と『空山靈雨』それぞれの書籍になる過程と内容について説明する。第三章では、具体的な散文学品における「雨」をめぐって、「雨」のイメージの相違を分析する。また、周作人と許地山が各自の作品集の自序で述べた「雨」と題した創作意図の相違につ

いて考察する。第四章では、当時の社会的背景の下で、二人が共に参加した文学研究会の成立と燕京大学新文学の教示という文学活動に対する態度や、一九二〇年代前半の人生経験の違いに着目し、周作人と許地山で同じ時代背景における散文風格の違いが生じる原因を明らかにする。

◆林芳超 現代中国語における範圍副詞“只”、“光”、“僅”に関する考察  
本稿では現代中国語の中で比較的使用頻度の高い範圍副詞“只”、“光”、“仅”の文法的分布・語義指向、及び語義指向の多義性を許す条件と三者の語義指向について考察する。本稿第二章では動詞性成分、名詞性成分、形容詞性成分、前置詞成分を修飾する時の文法的分布と語義指向について考察を行った結果、“只”の使用範圍が一番広く、次に“光”、最後に“仅”であることが分かった。また比較により、この三つの範圍副詞の語義指向が多義性を持つ可能性は範圍副詞自身の使用範圍と関連性があることが明らかになった。第三章では、“A 範圍副詞

の後につく項が2つ以上ある、B、対比構造、を持つ文型に置かれていないの二点が「只」、「光」が語義指向の多義性を許す条件だと明らかにした。「只」は数量詞を修飾するのが一般的であるため、語義指向に多義性が生じにくいと考えられる。第四章では焦点と焦点敏感演算子の概念を導入し、動目構造を修飾する時の相違点について分析を行った。範圍副詞は文の焦点の位置の移動に伴って、指向対象も変わることが分かった。

「只」は使用範圍が一番広く、文中の焦点になりうるものが多いため、語義指向の多義性を持つ可能性も高い。共に「ただ、わずかに」の意味を表すが、「只」は数量の少なさを、「光」は動作や受動者の範圍を、「只」は数量も動作や受動者の範圍も限定するという相違点があった。使用範圍は「只」が一番広く、次に「光」、最後に「只」である。また、範圍副詞の使用範圍が異なるため、文中の焦点の位置の移動の可能性も異なり、「只」を含む文における焦点の位置の移動の可能性は「光」、「只」を含む文より

高いため、「只」が語義指向の多義性を持つ可能性は「光」、「只」より高いことも分かった。  
〔近況報告等〕

◆谷口真由実 松原朗編『杜甫と玄宗皇帝の時代』の紹介 松原朗著『杜甫と玄宗皇帝の時代』が二〇一八年六月十五日に勉強出版より上梓された。二〇一六年に『杜甫全詩訳注』（全四冊）が講談社学術文庫から出版され、杜甫の研究は急速に進みつつあるが、杜甫詩の誕生の背景、とりわけ玄宗皇帝時代に光を当てた研究がこれほどまとまった書籍として出されたことはあまりなかったのではないだろうか。その意味で杜甫研究者はもとより、杜甫の詩や盛唐の文学に関心を抱く方々などにとっても待望の書である。

構成は、松原朗氏の序説、続いて後藤秋正氏の総説「杜甫とその時代—安史の乱を中心として」、第I部「杜甫が生まれた洛陽の都」、第II部「玄宗の時代を飾る大輪の名花—楊貴妃」、第III部「唐の対外政策（唐の国際性）」、第IV部「杜甫の出仕と官歴」、第V部「杜甫の文

学—伝統と革新」、第VI部「杜甫の交友からなる。杜甫はなぜ「戦乱の克明な記録者となった」（松原氏序説）のかとの問いを多角的なアプローチで解明せんとする意欲的な書であると考えられる。第V部「杜甫の社会批判詩と諷諭詩への道」に拙論を収めている。ご批評を賜れば幸いです。

◆矢嶋美都子 『唐詩の系譜—名詩の本歌取り』（研文出版社）を出版しました。本書は、唐詩が六朝詩を淵源とする美意識を取り入れ、洗練されて一級文学になる過程を辿ったものです。唐代には、科挙制度の定着とともにその試験科目の詩（特に近体詩）を上手に作るうとする努力がなされ、例えば「唐詩の名作をお手本に」した。その方法は興膳宏先生の「王昌齡の創作論」（『中国詩人論

岡村繁教授退官記念論集』所収 汲古書院 一九八六年刊）から窺え、和歌の創作技法「本歌取り」の発想に近いといえる。うまく「本歌取り」ができた詩には作者の機知や思いが、本歌や本歌が織り込んだ六朝詩のイメージと重なり重層

である。

「杜甫の出仕と官歴」、第V部「杜甫の文

学—伝統と革新」、第VI部「杜甫の交友からなる。杜甫はなぜ「戦乱の克明な記録者となった」（松原氏序説）のかとの問いを多角的なアプローチで解明せんとする意欲的な書であると考えられる。第V部「杜甫の社会批判詩と諷諭詩への道」に拙論を収めている。ご批評を賜れば幸いです。

である。

的な深い詩想として詠われている。しかし作者と本歌を共有できていない今日では、それとは気づかず、変な表現のある詩とされがちなので、語句の意味解釈だけでは釈然としない唐詩（本歌取りしている詩）の本歌を探し、その途中で出会った数多の作品を系譜として整理し、本歌の背景、お手本にされた名作たる所以を紹介した。有名な唐詩にも言及しているので本書でもう一度読み直し、唐詩の面白さ、魅力を味わっていただきたいと願っています。